

特集 ことばを使う力を育てる

ライティング活動を
どう積み上げていくか

工藤 洋路 (東京外国語大学)



ライティングの重要性

『中学校学習指導要領解説』(文部科学省)によると、新課程では、授業時間数が増えるが、指導すべき語数が900語から1,200語程度に増加した以外は、特に指導事項を新たに追加していない。つまり、これまでの指導事項についてさらに定着を図ることが望まれているとしている。定着にはアウトプットの活動が不可欠であるため、スピーキングと並び、ライティングはさらなる指導の強化が期待できる。

では、ライティング活動はなぜ重要なのか。まず、書くことによって読み手との間に生まれるコミュニケーションが可能になり、英語を実際に使うという体験をすることができることは言うまでもない。このほかに、ここでは2点、ライティングの重要性を提示したい。

1点目は、書くことで、生徒が英語の言語形式に対して深く考えるようになることである。生徒たちは書きながら、綴りは正しいか、主語に対する動詞の形は適切か、名詞は単数形か複数形かなどを、少なくとも話しているときよりも、じっくりと、そして分析的に考える。書きながら、「主語がIで、昨日のことを述べているから動詞はwasだな」とか、「stayの過去形は見たことがないけど、同じ(a)yで終わるplayはplayedだからstayedかな」といったように、ルールを確認したり、ルールに対して仮説を立てたりすることで、英語の言語形式に対する意識を高めることができる。意識が高まると、理解も深まり、定着へとつなげることが可能になる。このようなプロセスをとおして、自らの学習を見つめることができる自立した学習者を養成することも可能になる。

書くことの重要性の2点目は、自動化の促進である。たとえば、過去形を学習している中で、「昨日野球をした」という意味を表す英文と、「3日前、学校の近くの公園で、部活の先輩と野球をした」という意味の英文を書くとする。前者では動詞の過去形を作ることに十分な注意を向けることができるため、正しく過去形を使うことができる可能性が高い。しかし、後者では、過去形の部分よりも、その他の内容をどう英語で書き表すかに、意識の大半を向ける必要がある。過去形への意識が薄い中で、正しく過去形を使えるかどうかは、その処理が自動化されているかどうかにかかってくる。自動化されていない場合は、負荷が高い後者のような場合は、現在形(原形)を書いてしまうなど、過去形の部分に間違いが起る可能性が前者よりもはるかに高くなる。

簡単だと思われる事項でも、実際に英文を書き始めると、文の先頭を大文字にすることなども含めて、多くのことを同時に意識する必要が生じる。そのような状況の中でも正しくターゲットの文法や語いを使えるようにするために、自動化の促進が不可欠になるが、それを実現できるのは、負荷をさまざまに調整することができるライティングであると言える。

ライティング活動に関わる負荷

次に、ライティング活動の負荷について、もう少し詳しく考えてみる。上で紹介したように、書くべき内容が増えると、当然のことながら、活動の負荷は高くなる。また、定着が不十分な言語材料を使うことが求められる活動も負荷が高い。加えて、書くべき内容を自ら考える必要がある場合は、さらに負荷が高くなる。つまり、「どう(How)書くか」より以前の「何を(What)書くか」についても生徒に委

ねられると活動の難易度は上がることになる。内容(What)と言語材料(How)の2点の自由度をどう調整するかによって、ライティング活動の難易度が変化する。

たとえば、教科書のGETには、ページの下にDrill活動があるが、ここではターゲットの言語材料は固定されており、さらに、イラストで内容も与えられているので、WhatもHowも制限されている。つまり、自由度が低いため、生徒への負担は軽い。学習したばかりの言語材料の練習には、このように制約がある中での学習が適している。

学習が1段階進むと隣のページのPracticeに取り組むことになるが、この中のWriteでは、自分のことについて書くことが求められる場合が多くなり、内容的な制約が少し緩くなる。つまり、Howは固定されているが、Whatの部分の自由度が高くなることによって、Drillよりも活動の難易度が上がる。ここで、Whatの部分を考えるのに注意を注ぎすぎて、ターゲットの言語材料を使いこなせない場合は、上で述べた「自動化」がなされていないことが考えられるので、Drillに戻るか、Whatのヒントを与えてあげるなどのサポートが必要になる。

このように、教科書では、書く上での負荷を徐々に上げていくような手順で活動が構成されているので、順を追って活動に取り組むと効果的な学習が期待できる。

文と文とのつながりを意識したライティング活動

さらに段階が進んだライティング活動を次に見ていく。各学年で数回設定されているUSE Writeでは、書くべき内容(What)と使うべき文法や語い(How)の制約が少ない活動になっている。つまり、活動の難易度(負荷)は高い。GETのDrillやPracticeと異なり、ここでは複数の英文を意味的につなげて書くことも求められる。学習指導要領では、「文と文とのつながり」と言われているところである。GETでの活動と比べて、すぐに英文が作れないことを想定して、ここでは、3段階程度のステップを設定している。

1年生のLESSON 9のUSE Write (p.111)を例にとってみる。最後のステップの3を見ると、3

文程度の英語を書くことが目標になっていることがわかる。この3文を導くのが、ステップ2の質問である。これはステップ1のモデル英文の理解確認の役割を担っていると同時に、ステップ3で書く内容(What)を引き出すための質問にもなっている。

「文と文とのつながり」の観点でこの質問を見てみると、①Where did Jessica go?は、全体のトピックを設定するための質問であり、②What did she do there?は、指示詞のthereがあることから、①と意味的にも文法的にもつながっている。③Did she have a good time?は、もちろんDid she have a good time (there)?のことで、同じく意味的にも文法的にもつながっている。同時に、学習指導要領解説で述べられている「身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと」に該当し、出来事や体験という客観的な事実に対して、考えや気持ちを書いて意味的に文と文をつなげていくという文章構成がここでは想定されていることがわかる。

このことを踏まえてステップ1のモデル文章を見ると、1文目はトピック設定であり、2文目では、ステップ2の②と同じくthereで文と文をつなげており、3文目も4文目もthereが隠れている。内容的にも、astronautやspaceといったように1文目でトピックとして設定した「宇宙センター」に関する単語が並んでいる。同じテーマに属する単語を使っていくことも文と文を意味的につなげる手法となる。そして、5文目は「気持ち」を書いており、それまで書いた事実に対するまとめの文としても機能している。

このようにモデル文を捉え、単に生徒にそれを参考にして書くようにと助言するだけではなく、それぞれの文の役割を前後の文との関連で見抜いていくことによって、自分のことについても、文と文とのつながりがある英文が書けるようになることが期待できる。USE Writeでは、ステップを後ろからたどって、最後のステップで書く際に必要な表現や文章構成に対するヒントを、それぞれのステップで拾い出して生徒に提示していくと、効果的な指導が可能になる。